

大神神社 175p, 151p
 押開くかどうか
 3294p 同

3293p 45p

大神神社 148p

「神宮門」
 紀上243p
 原文

紀上242p
 大神神社 147p

3287p-2/4

3282p-2/2

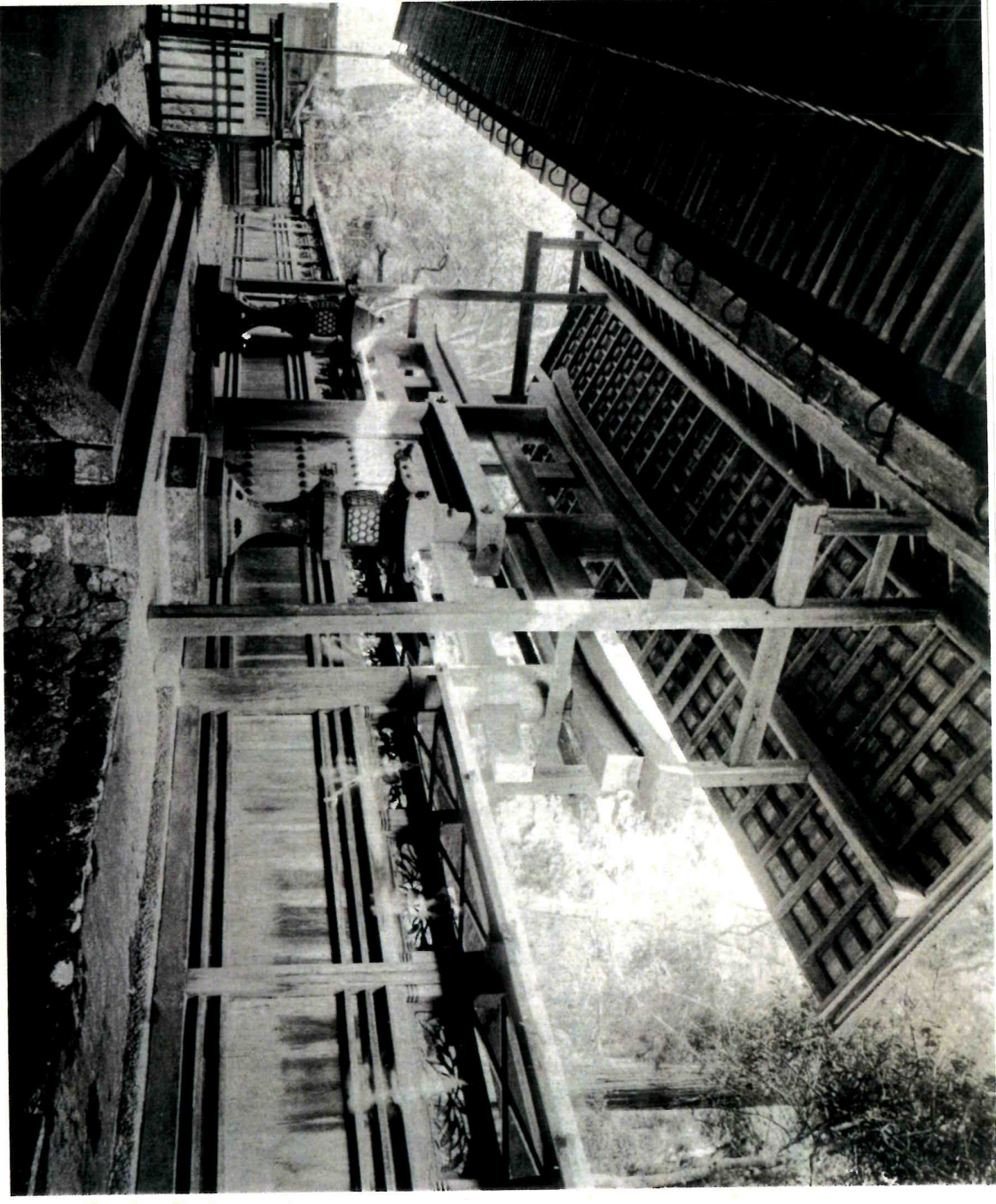
「古来御本殿の無いこの神社に、いつ頃拝
 殿が建てられたのかはうかがう術もないか、
 戸も日神宮門も、拝殿を指すのであろう
 う
 という。へ大神神社に中山和敬、学生社、
 一四七頁参照）
 ・そうかも知れない。
 ② いかにかいたう、
 へ拝殿正中の奥、つまり拝殿とお山（三輪
 戸と山）との境にある「三ツ鳥居」の文を
 か
 と想像される。（第416図へ大神神社および
 の周辺）写真図版596・597へ大神神社の三ツ
 鳥居参照）
 本鳥居には厚板の内開式御座が取り付け
 られ、石の唐居敷（軸受）が据えられている

・左頁の上に西に廻りて下す。

大工
掘裁
1枚。

3,287^P-3/4

新権
許諾
不要
す。



1404

写真図版 596 大神神社の三ツ島居 (明治時代 重文)

明治16年(1883)から大正年間の様子を示す。(※保護の為に屋根が設けられている)

撮影者: 工藤精華 (1848 ~ 1929年)

大(おほ)神社(じんじゃ)・石上(いそのかみ)神社(じんじゃ) 行(ぎょう) (8) 学習研究社、2003年1月2日発行、

6、31頁参照

注文!

3,287^P - 4/4

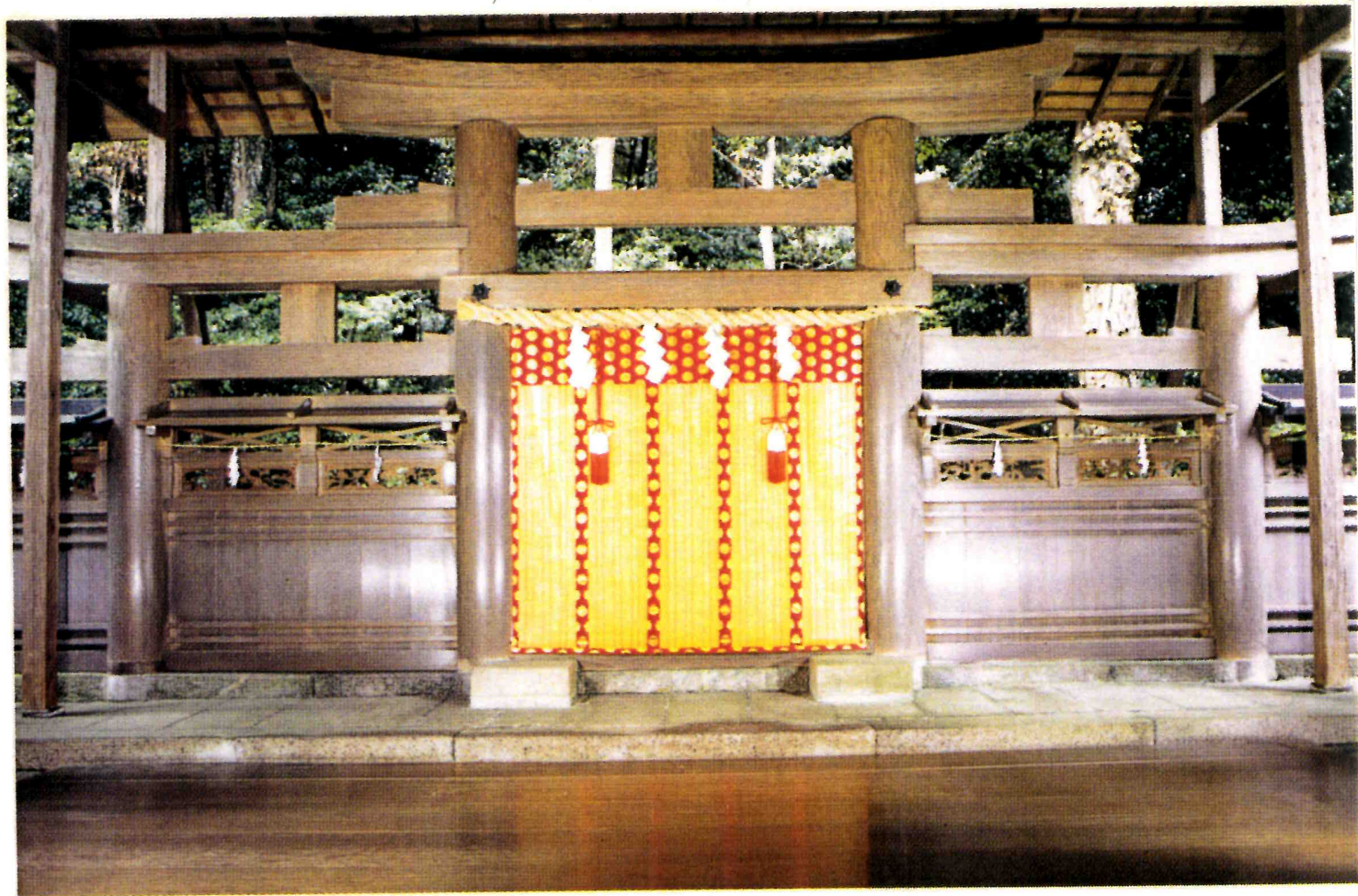
・カラー

・この写真と左頁の下に
配置したい。

・明るく掲載下さい。

④ 2761^P 1/4

・大雲文社紙殿の1面を
向かって左から始まる。



1424

おほみわ

三ツ鳥居

1324

写真図版597大神神社の三ツ鳥居

『全国一の宮めぐり』学習研究社、2004年1月15日発行、115頁参照。

1224

・現在の三ツ鳥居の様子を示す。

18154 次版 554

3285-1/2
144

3,288^P

という。(「大神神社」中山和敬、昭和四十
 六年五月発行「一五〇頁参照」)
 ・この御座を数人がかりで押し開くのだらう
 か。

「とにかくまあ」
 「よくよく飲んだものよ」
 ふうふうになつて、もうたぞ。それでは二水
 にて御開と致しまいよう
 ■天皇はこういふと、さらに大物主神の遠路
 をもいとわぬ勞に感謝してこう言われた。

大倭国の

「大物主神におかれましては、わざわざ三
 輪山の麓へ迄もお越し下さいます、忝く有
 難く存じます。果して我等の心尽の今日の宴
 御満足いただけましたのでしうか。どう
 かお気をつけなさつて、一っ飛びに大神の山
 頂へお帰り下さいますように」
 ■ここに佐介彈苔である活日は、阿蘇山の
 物主神つまり口御神火弓を手にすると、ふら
 つく足で立ち上つたが、――そのとたん、
 足がもつれて躓主そうになつた。

そつまずく(ツマヅク)

(第416回 活日社 参照)

$\rightarrow H4.10.12(A) \textcircled{古}$
 $\textcircled{古} 3286^{19}$ 挿入正中の奥 $\textcircled{古} 3296^A$ $\textcircled{古} 3287^{1/2}$
 $\textcircled{古} 3285^{1/2}$ 215斤 175斤 210斤と $3,289^P$

板 3290 # 3行 ゆうご 記
に1 ひか おいおう 揺り動く 2263^p
西も東も分かつた、 いやはあ前夜6行

と申され
てにかゝ
何にせよ
向ひて

コクヨ ケー20 20×20

3287² - 3/4 11 2/29 306

前5分
よいお
電。野が回る

3,290^P

ひと
一つ飛ぶ
3288^P
15分

562^P 80

1650^P

せい
所為 1214^P

こと

すると、驚いたことに、
まわった所為なのであらうか、三輪の殿の鳥
居が、幾重にも重なって見えた。
ううむ。確かに私は、随分、神酒を飲み
すぎたようだ。目がぼろと翳んで、鳥居が
くつにも見える。
活日は頻に目を繁叩き、目を擦って眺め
遣ったが、——どうしてもその鳥居は、高
く低く重なり合っているように見えるのだった。
「ふむ待てよ。そういえば、
この鳥居から、——飛びすればすぐに
阿蘇の神山に着ける。」
と皆が申しておったが、うん、なるほどある
ある。たしか鳥居の向うに神山が見えるぞ。
いかし、なんとなく奇妙だな。私は遠くの前
から海を渡ってやってきた筈だ、神山がこ
れほど牛近にあると思えないのだが、……
いやいや、これも酔が回って来たからなのだ
ろう。おうおう、それはともかく、何とも眼
くてたまらない。もう私は故郷の神山に帰っ
てきているのだらうか。これは確かに神山

大日主 6世3年 ④4982-36
 阿の神 宗形氏 ⑤5012
 神の子の父が ④4990
 幸を作った ④3279-1/2
 大神比義は 大日主の ④4990
 三子 ④4990
 紀上 242
 3291
 ④3287-1/4
 1755-1877
 5626.10
 ④3287-1/2
 紀上 242
 宗神氏
 ④3284

たよ。早く山の頂へ帰り、暖まって寝るこ
 とにしよう。
 ④即ち、押し開かれた神宮門は三ツ島居
 を通って大物主神は、神山日三輪山
 の頂上へと幸行された。
 ④ともあれ、
 三輪山の山頂にまた、大物主神の火が点
 った。
 と考えてみたい。
 ④ほんの少し前に触れたとおり、崇神紀八年
 十二月二十日条には、
 ④所謂大田田根子は、
 始祖なり。
 と記されていいる。
 ④それでは、大田田根子が三輪君になる以前
 の、日それまでの三輪君は、いったいどう
 なったのだらうか。
 ④それは、まったく定かでないことである。
 ④もーかいたら、
 ④従来の日三輪の明神は、
 ④田根子に譲り渡す
 ④朝廷でお仕えする

3279^p-1/2
3283^p 19

3279^p-1/2 99
3278^p 3279^p-1/2 108
天竺(天竺) 3281

3.292^p-1/2

ちなみに述べると、日本書紀中に、三輪君の
大輪君が多数散見される。(日本書紀索引参照)

↑↑↑↑↑ 古来の日三輪の明神は、

熱田神宮や宗像神社などの例後述と同様

新たな三輪君日大田田根子らの次席の位とす

れたの(大)ろうか(第二章末尾(国王の御代替え)参照)

なにと想像される

・なお、先述のとおり、

神の子へ媛(媛)五十鈴媛命の父が、自

分の住む家をお寺風につくりかえたのが、大

御輪寺の始である

と言ひ伝えられている。(第六十五章(三輪

大明神縁起)の項において既述)

とすれば、

(1) 大田田根子と三輪の明神(三輪君)は

大田田根子に位を譲った後も、神様に仕えた

(2) 仏様にお仕えした

という可能性もある。大田田根子は、

ほんの参考までに述べると、

大神神社の日三輪君と、
欽明朝にハ

下

441L

中3203 起修 3292 1/2 8行 末 3292 1/2 120 122

中3204 1/2 8行 確証前頁 7行

3,292 1/2

中321 12行

中3433 3434 341 肥後

大神氏 中3437 2494 2568 1/2

2568 1/2

HV

多数散見される。

(「日本書紀索引」参照)

幡神を祭る神主となつた日大神比義らとの間に、関連性はない。ように思われる。

宇佐神宮の官司として、藤原氏の一族である宇佐氏と共に奉仕した日大神氏らについて、

第六十五章八肥後国の菱形の出現した八幡神へ大神氏と宇佐氏へ

の項において、思うところを述べてみたい。

では、大田田根子を始祖とする今の三輪君について、

輪君に一つは、一休どう解釈したらよいのだらうか。

もしかしたら、へ神武天皇と比売多良伊賀余理比売との間に生まれた長子日子八井の命(記)は、三輪君と称したのではなからうか。

とも思われるが、詳らかでない。(第六十四章へ媛蹈鞰五十鈴媛命の項)日子八井の命(参照)ちなみに述べると、日本書紀中に三輪君、大三輪君が

大神神社 150^P 3行
 南北19%目 149^Pに写真・模型 3.293^P
 16間 $\times 1.8^m$ 大神神社
 $\frac{128}{16}$ 148^P
 $\frac{16}{28.8m}$

三輪島の三つ島居
 大神神社 21^P 145^P
 148^P 拝殿正中の奥
 3284^P 3289^P

三ツ島居の神秘

全国に島居は多いが、拝殿正中の奥、つまり
 三輪山（三輪島）との境にある独特の
 三ツ島居は、大神神
 社だけのものである。（三輪島居とも三光島居ともいう）

昭和二十八年十一月十四日に重文指定された
 三ツ島居附瑞垣・左右延長十六間

（約二十九丈）

と記されていゝる。

先ず、この三ツ島居は、どのような島
 居なのかについて見てみよう。（写真図版 596・597 参照）

三ツ島居は、明神形式の本島居の（南
 北の）両側に、やや小型の脇島居が組合わさ
 れ、脇島居の両側に瑞垣が取り付けられてい

（南側と北側の両側）

本島居の本柱二本、脇島居の脇柱二本は、
 いずれも丸柱の掘立式であり、それぞれの柱

写真 1155^P 無し

写真 1155^P 無し

鳥居 1625° 57' 1333 北
大神神社 148° 1192 鐘
141

大神神社 148°

3,294°

大神神社 151° 2' 51' 北
門扉 2209° 透塀 1182°
こと 門のとびさ

鳥居 462°
唐居敷 3287° 2/4

大神神社 150° 末3斤
根柵 1121°

根の土中には、東西に一本の根柵（柱の傾倒）
沈下を防ぐための木が設けられている。
また、本鳥居には、厚板の内開式御扉が取
り付けられ、石の唐居敷（門扉の軸受）が据
えられていいる。（既述）
瑞垣と全く同じ形式の透塀で塞がれている。
すなわち、南北両側の脇鳥居を隔り抜ける
ことは出来なない。
このように三鳥居は独特の鳥居形式であり、
三輪鳥居にもいわれる所以でもある。
また、ここに、奇異な感を受ける鳥居である。
それは、珍妙な形の鳥居が作られたのだろうか。
後世、実に様々な説がとえられていいる。
とはいえ、社記には、
「古来一社の神秘なり」
の一行の記録しか見当らない。
また、日大三輪鎮座次第（鎌倉前期の嘉
禄二年、一二二六年）にも、
当社古来無宝殿。唯有三個鳥居而已。奥

大分県 1787° 1787°

大神神社口絵類(三ノ加第41712)

同文
 ① 2640^{P-1/2}
 1989 3,295^P

津磐座大物主命、中津磐座大己貴命、辺津磐座少彦名命と見えてゐるだけである。○ともあれ、三ツ鳥居創建の意義、創建年月等を詳らかに語るものは、現在全く何も無く、一社の神秘なりとして、神聖な秘奥は窺い知れないようになってしまつた。なお、この三ツ鳥居の扉には幕が懸けられ、その上に御簾が吊られてゐるので、通常、中央御扉を見ることはできない。

しかし、先に述べたように、一年にただ一度だけ、元旦の午前一時（昔は丑の刻）から始まる大物主神社の繞道祭（ご神火まつり）の時にのみ、荘重な衆の音とともに、三ツ鳥居の御開扉が行なわれる。↑↑↑（第四十三章へ御神火まつり）の項において既に正中の三ツ鳥居を拝してその奥、禁足地の右側に、檜皮葺屋根の御神庫があり、大神神社の御神宝の数々が納められてゐる。○その創建年月ははっきりしないが、板倉高床式の特別建造物である。

この建物（御神庫）に相對して、三ツ鳥

令和2.12.29(火)~12.30(水)

→ H4.10.14(水)⑤
H11.6.25(金)

3,296^P

大分 152^P

大神神社 152^P

大般若 1346^P

12/30
F 12/29
12/29

居奥の禁足地左側に、明治初年神仏分離が行
なれぬまで、大般若経蔵が建てられた
と記録されてゐる。
●神域内で最も神聖な禁足地の中にも、日仏
教の施設が建てられたということに、深い
意義が認められる。(大神神社に中山和敬、
学生社、五七頁。一四五―一五二頁。一七二
頁等参照)

※

③3040-1/5 平田
 ③3040-1/6 あたがら 5P
 ③3313 間柄 血族・親族のつづきあり
 ③3204-2/2 紀上213 注28-2/4
 ③3204-2/2 天皇の長子日子八井命の母が
 ③3338-2/3

健甕龍命

大和国の三輪山の山頂から立ち昇る一条の黒煙りは、ゆつたりと天空を目指した。

さて、その後、三輪山の双方の間柄が、いよいよ親しいものとなつたように思われる。

大和の「大神神社」に相当する「阿蘇神社」の祭神は、神武天皇の孫に当り、八井耳命（綏靖天皇の兄）の子である。龍命とされたのだった。へ「日本社寺大観」名著刊行会へ「阿蘇神社」参照）

ようするに「神武天皇と大三轮神（三輪大明神）神の子である姫踏鞠五十鈴姫命との孫、健甕龍命は、阿蘇神社の祭神だ」といふことになるわけである。

それほどまで「阿蘇神社」と「大神神社」の関係は、深いものになつた。

相互

ところか甚だ奇妙なことに、初代の神武天皇（記紀）から数えると、おつと後代

の第十代に当る「景行紀十八年六月十六日条には

「阿蘇國ト、阿蘇都彦・阿蘇都媛の二の神

有す

と記されている。

江戸中期の国学者、本居宣長の「古事記伝」へ古事記の注釈書によれば、阿蘇都彦は健甕龍命（神武天皇の御孫。神八井耳命の御子）の神靈として、阿蘇都媛は健甕龍命の妃（阿蘇系図によると、阿蘇の草部吉見命の女）の事である、という。

また、健甕龍命が草部吉見命の女を娶って

速瓶王命を生んだと、景行天皇が、

速瓶王命の子惟人に仰せて、宮地村に【神宮】を

建てさせ給えるを、阿蘇神社の創祀とする。

一か一説に、孝靈天皇御宇の創建なり、

ともいい、詳らかでない。（「日本社寺大観」

名著刊行会「阿蘇神社」参照）

定かでないが次のように考え得ようか。

①「倭国建国から間もない」景行朝ころの阿

蘇国には「阿蘇都彦」・「阿蘇都媛」の二神

加えられた

米なお下日宮には「みや・御殿・皇室に關係ある神社という」（「広辞苑」）

581P

祀 403P

3298P

5385P 同文

2193P

295P

3338P

316

日本社寺 581P上59

3299P

「定かたない」 3298P 末3行
天つき改行

3,299P-1/8

阿蘇神社 3375P

神八井耳命の子に
阿蘇神社 3375P
阿蘇神社 3375P

同文 3338P-2/3

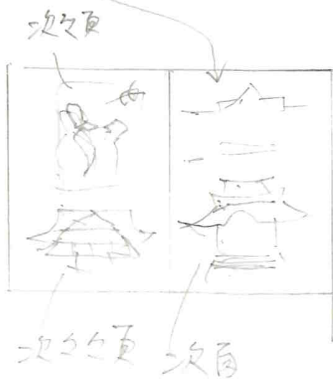
②その後、神武天皇（後期継体天皇）と姫
足彥五十鈴姫命との間に神八井耳命が生まれた。
③神武天皇の孫（神八井耳命の子）であ
る「健甕龍命」が阿蘇の宮地村へやって
きて阿蘇の草部吉見命の女を娶って速瓶玉命を
生んだのは、欽明朝のことであつたろうか。
④第三代目の天皇「景行天皇」に相当する「
敏達天皇は、速瓶玉命の子惟人に命じ、宮
地村に神宮（神社）を建てさせ給うた。
これを、阿蘇神社の創祀とする。
⑤その完成は、日辺日本国の孝靈天皇の御代のこ
とであつた。（第1表参照）敏達朝に相当する
⑥惟人は、
健甕龍命
阿蘇比咩命（健甕龍命の妃。阿蘇の草部吉
見命の女）
速瓶玉命（惟人の父）
を祭神として祀つた。（日本社寺大観「名著刊行会阿蘇神社」参照）
という経過が考えられるように思われる。（字
い）うまでもなく推証のないうことはある。（字
真図版 598 602 参照）

お48図は書きかへてあり

3.299P- 2/8

・カラー

・右頁の上の方に
載せる。



13QG

14QG 写真図版598 阿蘇山上神社

『阿蘇神社』神社紀行(17)学習研究社 2003年3月13日発行 22頁参照

- 阿蘇噴火口を間近に仰ぎ見る場所に鎮座している。
- 阿蘇神社の奥宮であり、かつては天宮、上宮とも呼ばれていた。

3,299P - 3/8

・カラー
・右頁の下に
載せて下さい。



と似ている
前面を分ける
3285
- 3/3
大神社の拝殿

大神社の
拝殿
3285
- 3/3

「阿蘇神社」の
この本18頁。

1364

1464

写真図版599 阿蘇神社の楼門

1266

(東へ向かって聳え立っている。高さ21m) (右づめ)

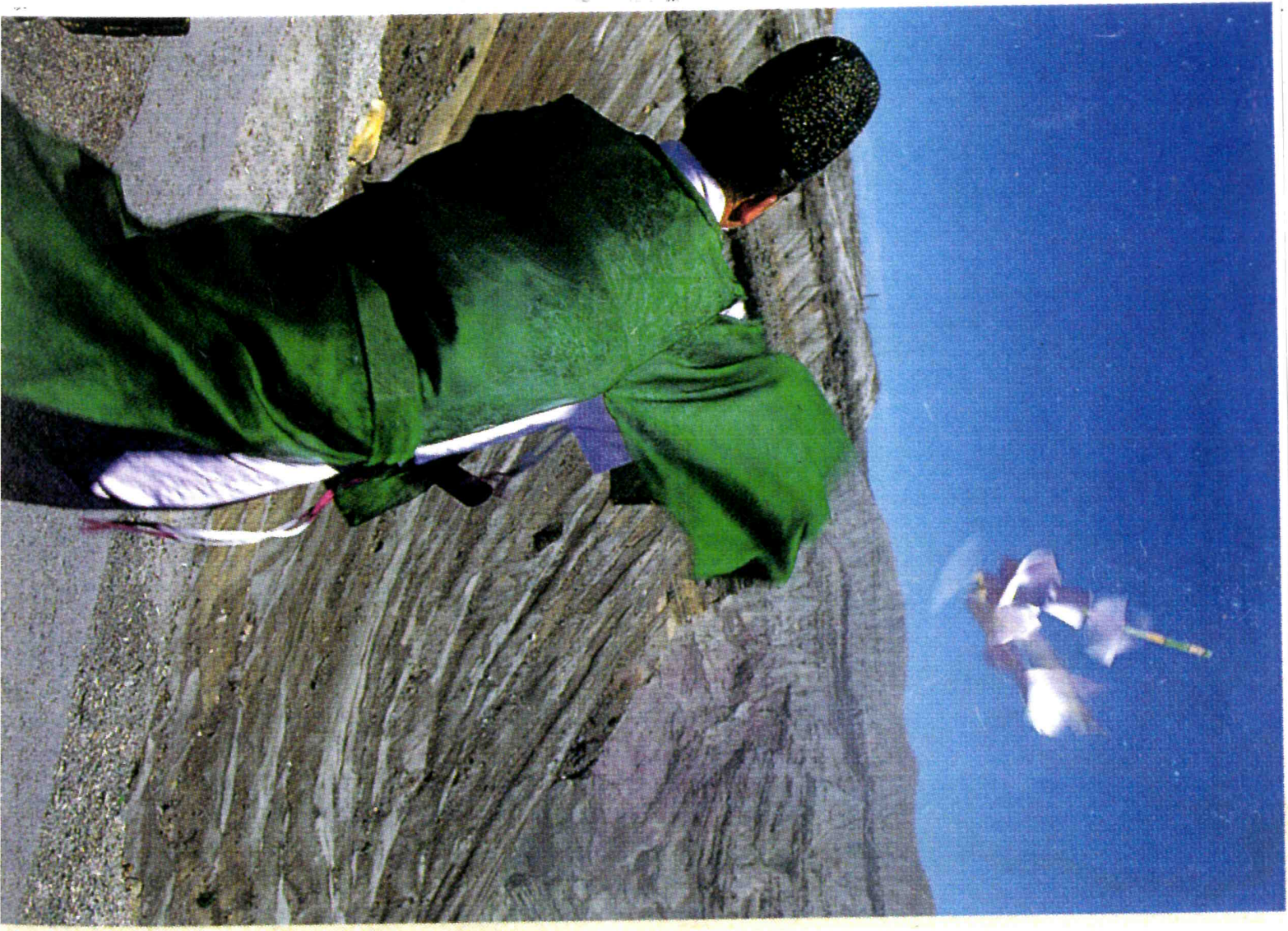
『阿蘇神社』神社紀行(17)学芸研究社、2003年3月13日発行、7頁参照

319

● 神社の神門としてはめずらしい二重屋根をもつ門。門の形式としては二重門であるが、ここでは楼門とよばれている。江戸末期の1849年(嘉永2)に建立されたもので、扁額の文字は、有栖川宮熾仁親王の梁筆。

・カラー
・左肩の上には
載せてT-shirt

3,299P-4/8



1309

1409

写真図版 600 阿蘇の火口に御幣を投げる

『阿蘇神社』神社総行(17)学習研究社、2003年3月13日発行、4頁参照

1209

・旧暦5月14日におこなわれる神事で、阿蘇山上神社から運ばれた御幣が神職の手で火口へと投げ入れられる。

3,299^P - 5/8

- ・ カラー
- ・ 左頁の下に
載せて下さい



あ 3374^P-48
大村神社にも
千本・カマキリがある

1409 写真図版 601 阿蘇神社の拝殿と神殿 ^{はいでん} ^{いんでん}

1309

『全国一の宮めぐり』学習研究社、2004年1月15日発行、172頁参照

- 1309 1409
- ・ 拝殿の背後に、一の神殿（向かって左）・二の神殿（同右）・三の神殿（中央奥）の3棟があり、^{とう} ^{みな} ^{とうめん} 皆、東面している。
 - ・ 東面しているのは、大和の大^{やまと}神^{おほみかみ}神社を敬^{うやまつ}うることだろうか。

大 3299^P 1454

321

神社紀行(17) 18頁 阿蘇神社の拝殿と神殿

北と0 40mを
入力して下さい。
34.4ミリの長さ

3,299⁸ - 6/8

カラー

右頁の上半分に
載せて下さい。



黒線トル

黒線とトル

黒い引き出し線トル

北島居 <入力お願い下さい>

1409 第418回 阿蘇神社 境内地図

灰色部分をもと濃色にしてください
(石作りの門)

1309

『阿蘇神社』神社紀行(17)学習研究社、2003年3月13日発行、18頁参照

3,299 - 7/8

- ・カラー
- ・右頁の
下半分に
載せて
下さい。



火祭り

1409
写真版 602 ^{あそか}阿蘇神社の火振り神事 (熊本県阿蘇市)

1309

『地図でめぐる神社とお寺』武光誠 ^{たけみつ まこと} 帝国書院 平成24年7月12日発行 4頁参照
1209 ^{たいまつ} 阿蘇神社では、松明の火を振り回して、^{ひのうず} 火の渦をつくる神事が行なわれる。^{いんい}

430(2018)8,24(金)~8,25(4回) 令和2(2020)3,29(月)~4,1(4回)

惟人 由 3298^p13行
131(2019)3,16(土)~3,17(4回)
令和元(2019)8,19(月)~8,19(3回)

3,299^p 8/8

国造神は、惟人の父のことか?

こと

11F 3/31
3/31
(*)

三		と	命	の	か	帳	る	十	四	都	七	を	向	神	る	阿	な
年		い	ミ	は	ア	に		一	六	比	九	は	か	殿	こ	蘇	お
三		う	ミ	健	蘇	は		宮	ハ	咩	宮	い	つ	に	の	神	く
月		。	ミ	龍	神	肥		国	ハ	命	ミ	め	か	分	で	社	く
十		(	ミ	命	社	後		半	十	を	ミ	と	つ	れ	き	拝	く
三		日	ミ	と	で	国		に	宮	は	ミ	す	左	て	な	殿	く
日		阿	ミ	の	占	(		ま	中	め	ミ	男	の	鎮	い	の	く
発		蘇	ミ	そ	め	熊		と	央	と	ミ	神	の	座	神	西	く
行		社	ミ	妃	ら	本		め	奥	す	ミ	グ	二	一	の	側	
ハ		社	ミ	神	て	県		ら	の	る	ミ	ル	の	十	御	は	
頁		紀	ミ	あ	お	(		れ	三	女	ミ	一	は	二	座	は	
参		行	ミ	る	り	四		た	の	神	ミ	宮	一	柱	所	足	
照		(	ミ	阿	そ	座		日	二	殿	ミ	健	宮	の	あ	を	
		二	ミ	蘇	阿	の		延	宮	は	ミ	磐	阿	祭	る	踏	
		。	ミ	都	蘇	う		喜	阿	下	ミ	龍	蘇	神	あ	み	
		。	ミ	比	都	ち		式	蘇	五	ミ	命	都	か	入	入	
		。	ミ	咩	比	の		三	都		ミ		都	三	小	小	
		。	ミ	の	咩	座		座	の		ミ		の	棟			

西暦五三六年 我が国 への 仏教 伝来 五三八年の二年前の

と た^ん た^ん の であろ う 下 第 46³² 表 参 照 下 陶 序 人 だ う

欽明天年(五三六)九月 百濟かて丈

六の仏像
立は身長一丈六尺になる大

さの
新
辺
の
坐
像。
そ
の
座
高
は
八
尺
な
い
し
九
尺

加標律である) を造り、願文(仏事に当る

施主の願意を述べる文を製して願文

大六の仏を造れば功德は甚大である

き、今いまつつし人で造りたてまつる。この功德

によつて天皇がすくはれた徳を傳らるゝ天皇の

お
治
め
に
な
る
彌
移
居
の
国
(
ニ
ニ
で
は
百
番
。 任

那諸国をさすも俱に幸いを蒙るやうに。

た天下の一切の衆生が、業苦を脱せるように

祈願して、この仏を造りたてまつる

と述べた。
(欽明紀六年九月、是の月糸参り

この頃、百済で造られつつあった丈六の仏

像加鑄型の中から姿を現わし、盛大な法要

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
 ㉞ なま ㉟ たの ㊱ かも ㊲ 知 ㊳ 水 ㊴ な ㊵ い。 ㊶ ㊷ ㊸ 奈 ㊹ 良 ㊺ の ㊻ 大

香取忠彦、草思社、六〇頁へ七五二年四月九日
開眼会の三年前の七四九年十二月二十七日の段、
繞

⑤では、下の方から銅を流し込んで、3,301P- 1/2
何のための銅が不明?

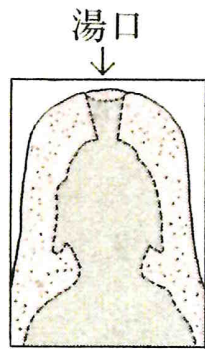
小林523°概
銅が

・カラー

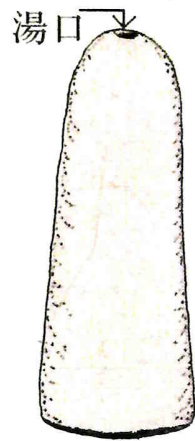
・右頁上半分に、
はみ出して
大きく掲載
下さい。

・文字を全て
ゴシックに
おいて下さい。

・灰色および
ピンク色のバツ
中央部ヨゴレを
トル。

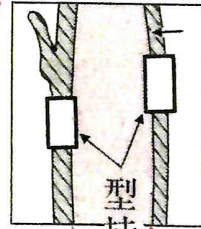


③全体を土で
おおおう。



*
③の位置に合わせる。
上げる
1字分左
へ移動。

②蜜蝋をかぶせて
完成像と同様に
彫刻する。

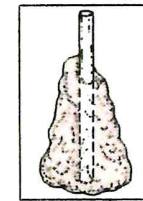


型持ち
3ミリ広げる



③上げる
1字分左
へ移動。

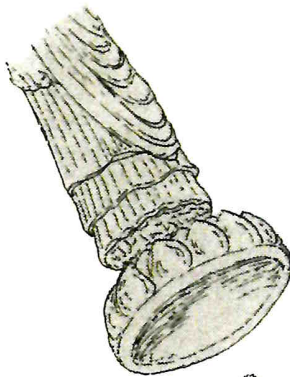
①像の概形を
土で作る。



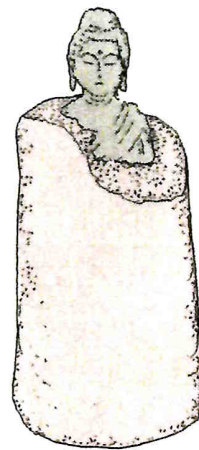
中のように



⑦内部の土を取り
出し、仕上げる。

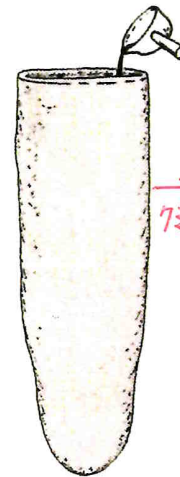


⑥型を壊して
像を取り出し
出す。



⑥上げる
1字分左
へ移動。

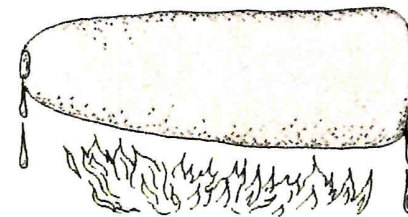
⑤頭部を下にして
溶銅を流し込む。



7ミリ右へ移動。

1字分左へ移動

④火にかけて、蠟を
溶かし出す。



家産の図書676P

ゴ4
12QG

・人間の腹中の
胎児も、通常
あたまは
豆頭が下の方に
ある。

14QG

13QG

第419図 蠟型鑄造法による制作工程 ← 製作は美術品
「仏像の見方、見分け方」 河原由雄監修、主婦と生活社、平成7年7月刊行の改訂版、160頁参照。 326P

カマ

3,301² 2/2

・左頁の上半分に、
限度一杯はみ出し
大きく掲載下か。



⑤ 5324² 1/5

1404

13.04

第420回 奈良の大仏が^い鑄型^{なか}の中から姿を現わす。

誕生会
4月8日ではない

『奈良の大仏』香取忠彦、草思社、1987年6月25日(13刷)発行、60~61頁参照。

・鑄造をはじめて2年後、天平勝宝元年(749)10月24日に大仏本体の鑄造作業完了。同年12月27日、僧5,000人による法要が、東大寺でいとなまれた。それは、大仏開眼会〔天平勝宝4年(752)4月9日〕の3年前のことであった。327^P

3304-3/2
3106 1/2
3265
3302 P-1/2

1752
242
119

孝謙天皇の天平勝宝元年(七四九)十二月二十七日条、第(四)参照
崇神十年(五三七か)七月二十四日「群卿
に詔し、民を導く根本は教化にある。今、神々を
お祀りして、災害はすべてなくなつた。けし
ども一日辺日本国「近畿地方」から遠荒(つま
り九州地方など)の人等は、まだ悲しいかな
法(仏の教え)を受けておらず、王化に預か
つていない。群卿を選び、四方に遣はして、朕
が法(仏の教え)を知らしめよ」と
と言われた。(崇神紀十年七月二十四日条参
照)
すでに述べたとおり、
継体十六年(五二二)に、司馬達等(達
止)がたがえさえてきた仏像は、大和国高市郡
坂田原の草堂に安置された。
という。(第五十六章へ仏像の渡来)の項に
おいて既述)
あるいは、この当時(五三七年当時)
へ三輪山の祭主となられた大田田根子(継
体)

紀上 248⁶

3.302²/₂

一日千秋の思³²⁷⁴ - 3/4
3266¹ ← 3282²/₂
3263¹

3106¹ - 1/2 司馬達等
3266¹ 同文

体上皇は、三輪山からさほど遠くない高市郡明日香村坂田原の司馬達等の草堂へお出かけになり、帰依礼拝しておられた。足繁くのかも知れない。(第六十五章「他神」の項において既述)
「仏への道」
それは、継体上皇に比べて、輝やかしい未来を約束するものと思えたに違いない。
の仏像が船で運ばれて来るのを、一日千秋の思いで待つておられたことであろう。
*
そしてついに、崇神十一年に相当する神武九年、待ちに待った仏教伝来の年(五三八)を迎えた。
崇神十一年条には、こう記されている。
「是歳、異俗多く歸て、国内安寧なり」
察するところ、
「是歳、招かれて、異俗(百濟の人)が多くやってきた。そうしてとうとう正式に、仏教

3268

3272

3,303 P-1/2

藤原(上)17 2行
巻井 67

紀下100 近15
「公伝」大カンマ 183
小林 115P
巻(ニ)

が東の日辺日本国(近畿) ~~伝えられた~~
という文とを示唆している ~~のであろう、と思~~

われる。

な ~~お~~ 欽明紀十三年(五五二)十月条は、

仏教伝来の記事として有名だが、

帝説・元興寺縁起は、欽明朝の戊午年(戊午は

五三八年)に我国へ仏教が伝えられた、と述

べている。(「日本書紀」下)日本古典文学大

系、岩波書店、一〇〇頁、注一五参照)

例えは、日帝説(上宮聖徳法王帝説)に

「志突嶋天皇(欽明天皇)御世戊午年十月

十二日、百濟国聖明王、始奉度仏像經教并僧

等。勅授蘇我稻目宿禰大臣、令興隆也」

と記されている。(第六十五章へ三輪山の御

神火✓の項において既述)

「恐らく、欽明紀十三年条の「仏教伝来」の

記事は、

①五三八年に、仏教が東の「日辺日本国」(近

「齊貢」

#上10 宇治谷下30
紀下100

三〇九三六
3314-2/2

ニ

3.303-2/2

3301 4行

二 新我新日

畿へ伝えられた歴史的事実

②五五二年に、仏教が西の日本大倭国に（九州）

へ伝えられた歴史的事実

の二つの出来事を、あたかも五五二年のことであつたかのようにまとめたものなのであるう、と思われ。

では、五三八年に仏教が東の日本国へ伝えられた時の様子は、どんなであつたらうか。

うか。

前半と後半の

欽明紀十三年（五五二）十月条を二つに分

け、先ず、東の国に日辺日本国に人仏教が伝わった時の状況と解し得るところを

抜粋してみよう。

百済の聖明王（更の名は聖王。在位五二

三、五五四）は、西郎姫氏達率怒喇斯致契等

を遣わし、釈迦仏の金銅像一軀・幡蓋若干・

経論若干巻をたてまつった。別に上表し、広

く礼拝する功德をのべて、

箕子の子孫か

#上下71^P 紀下101^P
宇治谷下30

3,304^P-1/2

てんく
#上下70^P
紀下101^P

紀下100^P 未4行へ

是の法は、諸法の中で最も勝れて
周公・孔子さえも尚知り得なかつたところの
ものです。此の法は、限りない幸福や果報を
もたらし、人々を無上の菩提（悟りの境地）
に導くことができます。
譬えていえば、隨意宝珠（物事が思ひのまま
まになる宝珠）を抱いて、なんでも心のまま
になるようなものです。
それは、遠くは天竺から、三韓に至るまで
教に従つて尊敬されています。
それ故、百済王の臣明（聖明王）は
謹んで陪臣の怒咄斯致契を遣わして、帝国内へ
伝え奉り、畿内に流通させたいと願つて
おります。
仏が、我が法は東へ流らむとのべら小
た言葉を、果すことにもなるのです
と言つた。

天皇（かつての天皇、継体上皇か）は
これを聞き終ると歡喜して、
走りたもうた

タイル ④ 3263° 2-3/4 左 125°

④ 3274°-3/4
④ 3282°-2/2 新 3,304°-2/2
④ 3302°-2/2 134°

538-68°
471
67 67

「恐らく」
④ 3303°-1/2
ホト ④ 3309°
紀#18 男大延天皇

タイル ④ 3274°-1/4
④ 3274°-3/4

という。(欽明紀十三年十月条参照)
つまり、
へ男大迹と天皇(継体上皇)が、喜びのあま
り、跳ね、走られた。
というのを示しているであろう。
・すなわち、
へ男大迹と、ホド(リ踊)とを、引っ掛け
て述べているのであろう。
と推察される。
なお、仏教伝来の年(五三八)には、継体
上皇は六十八歳であつたろうか。
また、先述のように、大田田根子(継
体上皇)は、
を祭ることを遠慮し、
海石榴市に仏堂を営まれたのであろう
と思われ。
「仏教は、当初、三輪の里海石榴市に渡来
した。
という。(「大神神社」中山和敬、学生社、
一〇九頁参照。第六十五章「大直禰子神社」

(2)

由 3316^{P-1/2}
由 3274^{P-3/4}

3300^{P-1/2}

3,305^{P-1/4}

④ 3300^P 同文
紀(下)92^P

すてに... 3302^{P-1/2}
先づのうと
前頁 129^P

であつた。

の項において既述)

前に述べたとおり」欽明紀六年(五三六

か)九月、是の月条には、

「百濟が日大六の仏像を造り、願文を製

して、大六の仏を造れば功徳は甚大であると聞

き、今つづいて人々で造りたてまつる。この功徳

によつて天皇がすぐれた徳を得られ、天皇の

お治めになる彌移居の国(百濟・任那諸国)

も俱に幸いを蒙る。云々

と曰つた。

と記されてゐる。(第六十五章「日刃日本

国」への仏教伝来)の項において既述)

も「三輪山西南の麓の海石榴市に前もつて作

られた仏堂に、百濟の聖明王が奉つた日大

六の仏像を加運び込まれ、丁重に安置された。

それらは、欽明朝の戊午年(五三八)のこと

③275-3/4

清水寺長谷寺に十一面観音の他に

③279-1/2 本年かある

3,305^P-2/4

③274-2/4 1行・3/4

③279-1/2 4行 6行 2/4 7行

③274-3/4 ③282-3/4

料 崩とないこと、
ナ長

更に清水寺・長谷寺では、それぞれ本尊十一面観音像の他に
四二六七頁下六六九六七の頁参照

この日丈六の仏像は、継体上皇が崩御さ
れた後にも、海石榴市の仏堂に安置され続け
た。

⑤ ①かし、欽明朝末年に、海石榴市の仏寺お
よび日丈六の仏像は、大神神社の二の鳥居
から北百廿ほどのところ（現在の大直禰子神
社近傍）へ移された。

③ ①用明朝や持統朝に、寺域が拡大されて日大
神寺に、日三輪寺などと呼ばれるようにな
った。

御本尊は、日丈六の仏像とされ、崇拝さ
れた。

④ ①の頃が定かでないが、聖徳太子以前に
大神寺に十一面観音像が安置された。

⑤ この十一面観音像は、神武天皇の皇后日媛
蹈鞬五十鈴媛命とも、日活玉依姫とも見
なされた。

⑤ ①ところか、奈良時代前半頃の火災によつて
本堂・丈六の仏像・十一面観音像などが焼失
してしまつた。

3.305^P-3/4

③3279^P-1/2

うかつな176^P
突 せんくさる

③3275^P-3/5同文

図 一か、奈良時代の天平年間てんぴやうねんかんに作られた
神かみ寺でうの御本尊ごほんぞんとされた、再建さいけんされた大おほ
と、いうことなのかも知れない。

＊

12.5 AM
聖徳太子御参詣のころ

もつとも、うかつた見方をすると、

聖徳太子の意向により、

大神寺の御本尊

日丈六の仏像は、どこかへ運び出され、

そのかゆりには、十一面観音像が安置さ

れて御本尊とされた

とも考えられようか。

●その日丈六の仏像は、どこかに現存して

いるのかどうか、などといった詳細は、

いまでもなく分らないとある。

＊